2016年10月
豊田市の水辺愛護会
発行：豊田市矢作川研究所
471-0025　豊田市西町 2-19
豊田市職員会館 1 階
TEL：0565-34-6860 担当：吉橋

お邪魔しました！活動日訪問記　2016 年 7 月 10 日（日）

矢作川と人の関わりを語る上でなくてはならない場所として、「百々」があります。読み方は「どうど」。かつて矢作川が物流の大動脈だった江戸時代から明治期にかけて、大変栄えた地区です。伐採から製材までを扱う大きな材木問屋があり、山で伐られた木材を川の流れに乗せて河口まで運ぶ「流送」のための中継基地だったのです。上流を下るため幅を狭く組んだ「山筏」がこの地の百善土場で荷揚げされ、幅の広い「平筏」に組みなおされて河口へと下っていきました。そのような歴史ある百々の地で、百々水辺愛護会は活動しています。

参考：平成 24 年度版豊田市森づくり白書

＊＊＊

７月の日曜の朝６時。快晴です。草刈り機を持って蚊取り線香を腰にさげ、三々五々、川辺に集まってこられるのは百々水辺愛護会の皆さん。虫よけスプレーのにおいがしています。

まずは今井菊平会長（68 歳）からのご挨拶です。「おはようございます！いい天気になりました。草もだいぶ伸びています。草刈り機の無い方はタケノコを伐って下さい。また生えてきて前と変わらないようになっています。…」。21 人の会員が、それぞれ自由に散らばって、草刈り・間伐スタートです。

あたり一帯にエンジン音を響かせ、会員は草刈り機を左右に振りながら一歩ずつ前へ刈り進めていきます。

＊

今井会長にお話を伺いました。

―愛護会で活動する前は、川辺はどんな様子だったんですか？

「全部竹やぶ。でも子どもの頃はそんなに竹は無くって密集もしてなかったね。昔は竹を編んで籠を作ったりしたけど今は竹を使うことはほとんどない。生えたら生えっぱなし。」「この場所（集合場所の開けた地）は地区の人ががらくたを置くような場だった。」

今は川にむかって清々しく眺望が開けています。竹やぶだったこと、がらくた置き場だったことな

ハグロトンボ

どは想像できません。

今井会長はご自身の退職後、途中からの入会だそうです。「同じ町内だし、ボランティアをしようかと。」「知った顔ばっかだもんで。三分の二がここで生まれ育った人。」気心の知れた仲間同士のつながりが入会の背景としてうかがえます。転入してきた方々ともこうした活動がつながりのきっかけとなっています。

―活動の楽しみはなんですか？

「ヤブツバキがあってね、仲間内では“椿ロード”って呼んでる。見て楽しめるよ。」ツバキの実が落ちて自然に発芽したものを、他の木などに覆われないように保護するのも活動の一環です。

―他には…？「年に一回、飲んだり食ったりするのが楽しみ。それがないと…」。「仲間内でワイワイやっとるから。」なるほど。

―活動は大変ではないですか？

「月一回の２，３時間だからそんなに大変じゃないよ。百姓もやっとるもんで。百姓やってる人が多いよ。」

―会員はどんな方ですか？

「60 代 70 代が多いね。今度新しく入った人もそう。40 代 50 代は勧誘してない。忙しいからね。サラリーマンの人は土日の休みはなかなかねえ…」。（平成 27 年度の同会へのアンケートによると、60 代が 60%、70 代が 35%、40 代は一人となっています。）

―これまでの活動で危険なことなどはなかったですか？

「怪我とかは今のとこないねえ。慣れとるから。」草刈り機は便利ですが使いようによっては大けがの危険もある機械です。これからもどうか事故がありませんように！

最後にまちのことについても聞いてみました。

―百々は川と関わりが深いまちですよね。材木を一時貯めておく百々貯木場（どうどちょぼくじょう）もあって。すごく栄えていたと聞きました。

「旅館が何軒かあったそうだよ。酒屋や薬屋があって金融業者もいてね。“嫁にやるなら百々へ“って言われとったらしい。」

“嫁にやるなら百々へ”とは、興味深い言葉です。百々に来れば、活気がある、豊かな暮らしが待っていた、ということでしょうか。通りに並ぶ家々を見ると、その名残を感じることができます。

＊＊＊

平井公園沿いの遊歩道に向かいました。そもそも愛護会が発足したきっかけは、平成９（1997）年に愛知県がこの遊歩道をつくったものの、使えない状況だったことに始まりました。初代の会長、澤井延禎さんの記事※を読むと、平成 15（2003）年に活動を始める前は、「荒れ放題で、両サイドから竹がどんどん広がってきており、手入れをしないと散歩もできない状態」だったと。既に上流や右岸にも愛護会があったこともあり、「みんなが気持ちよく川辺を散歩できるよう努力しよう」と発足

土をかぶってしまった石畳

竹を伐り出す

伐った竹をまとめておく

発足当時の会員。カキツバタ色のスカーフ着用。
ＲｉｏＮｏ.65 澤井延禎氏記事より

会員のみなさんの集合写真（取材日）

したそうです。

※Rio No.65(2003 年 9 月)

また、このエリアにかつてあった流れ橋を復活させようという気運もあったそうですが実現には至っていません。設置されている看板によると昭和 26（1951）年、もともと渡し場だった場所に流れ橋はつくられました。水かさが増えると中央から扉を開くように桁が流され、水が引いたら復旧できる橋です。昭和 34（1959）年の伊勢湾台風による大洪水で壊れ、遺構を残すのみとなっています。

古くは渡し船、そして流れ橋があったこの地は矢作川の左岸と右岸を繋ぐ場所としても頻繁に利用される場所だったのですね。

＊

両側に竹が生えている遊歩道では数人の会員が活動していました。確かに手入れをしなければ、道はたちまちに竹に覆われてしまいそうです。

会員のお一人がいろいろと教えて下さいました。

「石畳だったのに大水で土が乗っちゃって。石がでこぼこしとって刃の草刈り機が使えん。ナイロンのひもの草刈り機でやる。」「今年はハグロトンボがいっぱい」「ウラシマソウっていうのもあって、貴重なものだと教えてもらった。そういうのを市民に教えて、来てもらうといい。」初代会長の思いにも通じるお言葉でした。活動のご苦労としては、草や竹の処理のことが話題になりました。燃やせると楽だが、近隣から苦情が出るため、燃やせないそうです。

ところで遊歩道はすごい蚊です。皆さんのばっちりな虫よけ対策の理由がわかりました。

＊

前会長（二代目）今井紀博さん（77 歳）にもお話を伺いました。

「この活動は休むことができない。竹の勢いがすごいからね。」遊歩道の様子を見れば頷けます。

「遊歩道と、川まで（のエリア）をどうしたらいいかねえ。川が見えたほうがいいのか…。竹があるとごみがたまるもんで。」これは他の愛護会も常に抱えている課題です。訪問者の視点、管理の視点、そして生態系の面からも、草刈りや間伐のやり方はたびたび検討すべき事項です。

＊

そろそろ活動終了時間です。幾人もの人が川のほとりに涼みに行き、流れる汗をぬぐいながら、滔々と流れる矢作川を眺めます。この眺めが竹やぶに遮られて一時期見られなくなっていたとは…。

最後は丸くなってお茶を飲み、談笑タイム。和やかに活動は終了しました。

＜百々水辺愛護会概要＞

結成…2003（平成 15）年４月
会長…今井菊平氏
会員…21 人（2016 年 7 月現在）
活動日…月 1 回、日曜日午前
活動地…豊田市百々町地内。
矢作川左岸（百々貯木場下流約 200m～下流へ約 800m）
活動地面積：約 10,000 ㎡

＜活動内容＞

① 散策路の除草
② 竹やぶの管理
③ ごみ拾い
④ ヤブツバキの保護作業

会員の皆さんに教えていただきました

百々の川と川遊びの思い出

“岩落とし”っていって、岩に立っとる人間を落とす。“岩くぐり”っていうのは潜って別の所から出てくる。

対岸へ行きたくってね。渡ると上流まで行って、戻ってた。

“ぎり”の渦でぐるぐる回ってた。深さは足がつく程度だから大丈夫！

川では栗石を採取してた。栗石の岸でね。

川は水位が下がって幅がひろがってる。

この岩のもっと上まで水が来てた。

中学の頃（昭和 30 年代半ば）に上流から白い水が流れてきて川遊びが禁止になってしまった。

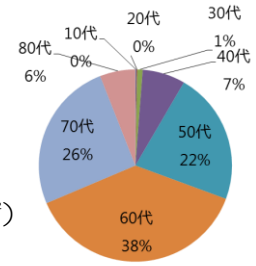
事故の知らせは聞いたことがなかった。

遊ぶのは午後 1 時から 4 時まで。大人が見守りをしてた。

参考：豊田市の水辺愛護会について

自治区の有志で組織（原則 1 自治区 1 団体）。市に指定された範囲内において活動を行う。

- 19 団体、656 人。・1 団体 12 人～113 人（平均 34.5 人）・男性 86%、女性 14%（2015 年 10 月現在）
- 活動延べ人数：4,270 人／年（2014 年度・会員 656 人）
- 活動頻度：月 1 ～2 回程度　主に土日の午前中
- 活動内容：河畔の竹木の間伐、草刈り、ゴミひろい、適切な維持管理についての知識向上、積極的な活動人員の確保、など
- 面積（上流 5 団体除く 14 団体のみ。上流はデータなし）：200,200 ㎡（平均 14,300 ㎡）



全体の年代構成

活動の成果

- 「ながめ」の獲得（川面が見られる、河畔林が見通せる。対岸へのながめ、対岸からのながめがよくなった。）
- 川まで辿り着けるようになった　・人と人との繋がりが強まった　・故郷に自信が持てるようになった。

活動の課題

- 会の継続性への不安（高齢化と人手不足）　・目標・将来像・方向性を考える場が少ない
- 作業のマンネリ化で「やる気のもと」がない　・河畔林の恵みという意味での「見返り」がない
- 愛護活動は生物の生息環境から見て適正か
- 地域住民・市民の関心が低い　等